

日本人の



京都、こころここに

vol.08

根源へのこだわり

名古屋大 素粒子宇宙起源研究機構長 益川 敏英さん



ますかわ・としひで 1940年名古屋市生まれ。名古屋大出身。京都大助手時代に書いた小林誠氏との共著論文で2008年にノーベル物理学賞受賞。昨春から現職。京都産業大益川塾教授・塾頭、京都大名誉教授。

1980年、日本共産党元幹部で中国に長くいた伊藤律氏が帰国した。彼のしゃべる日本語が、「何々であります」と文語調だったことに驚いた記憶がある。確かに、ニュース映像で見る昭和の初めの日本人たちも彼のように話していた。

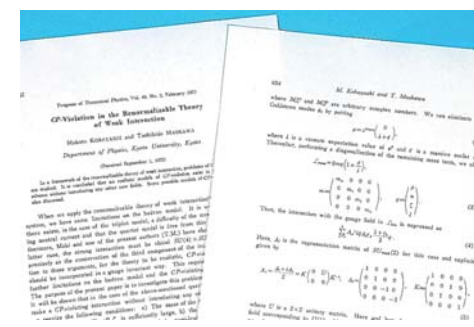
科学の世界でも、変化の速さにはかり目がいき、根源的なものにこだわらなくなっているのではないだろうか。

ところが最近、「何々じゃん」などと、語尾まできちんと話さないことが多い。世の中の変化があつたし、悠長に話してられないのかもしれない。

日本語は本来、語尾を添えて微妙なニュアンスを現すが、現代の話し言葉からは、そういった余韻が失われたように感じる。

科学自身が大きく複雑に 集団で研究主流

競争が激しいため、他の研究者に後れを取らないよう、つばを付けておく考え方だ。



ネット普及で 情報の流れ速く 過当競争の面も

たころには、国や大学によって研究の方法や内容が異なり、「学派」や「流派」が生まれていた。そういったものは現在、科学の世界からほとんど消滅してしまつた。

研究者人口が増え、過当競争に陥っている面もある。日本の大学では1990年代以降、研究の中心を学部から大学院に移す大学院重点化が行われた。大学院生の定員が大幅に増え、博士号を持つ人が急増した。研究者は、論文の質と量で評価される。根源的なことにこだわり続け、論文が書けなければ、研究者として生き残れなくなってしまう。

そうならざるを得ない事情も確かにある。まず、科学自身が大きく複雑になり、一人の研究者では深い議論をしにくい。科学者が集団として研究を進める形が多くなつて主流になっている。数学の世界でもそうだ。重要な数学の問題について、一人の数学者がまず、解明に向けた有望なストーリーを提唱する。「こういう定理を、こういう順番で証明していけば解明できるはずだ」と。すると、多くの数学者が個々の定理をバラバラに証明していく。互いの証明の間には食い違い、いわゆる「ギャップ」が残るため、最後に一人の研究者が全体を見通しながらギャップを埋めていく。そういったことが実際に起きてきた。



夕暮れの京大時計台が校舎の窓に映る。根源へのこだわりは今?

論文の質と量で評価される 静かに研究できることも大切

戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

日本の暦

処暑 (8月23日)

処暑とは暑さがやむという意味で、この日だけをいう場合、次の二十四節気「白露」までの期間をいう場合もあります。朝夕はめっきり涼しくなる時ですが、日中はまだまだ残暑厳しく「暑さがまだとまらないうち」に「暑さがまたとまらないうち」と解釈する人も多いとか。二百十日も間近で、台風襲来にも要注意の節気です。七十二候では「綿の柎(はなしべ)ひらく」。綿の花を包む萼が開く日とされ、次の季節への期待に膨らむ頃でもあります。

リレーメッセージ



イラストレーター 絵本作家 永田 萌さん

最近の日本のおとなは「正しく叱る」ということをしなくなった。私の子供の頃は、家族以外の見知らぬおとなにたびたび叱られたものだ。「そんなことしたらあかんとか」「いつでもお天道さんが見たらばって」と言われて、恥ずかしい思いや情けない思いをして社会のルールを学んだ。当時の人たちは、そういうことがおとなの役割だと知っていた。だが正しく叱るには良識と信念と勇気が必要だ。当然エネルギーも。今のようないやな時代で疲れ切っているおとなの私たちは、無意識に叱ることから逃げているのかもしれない。と反省を込めて考えていたのだが、最近立て続けに希望の持てる状況に出会った。京都ではまだ「叱るおとな」は健在だった。最初は地下鉄の中で傘を引張り張って遊ぶ小学生。次は狭い歩道を自転車を並べて走る大学生。極め付きは阪急電車の中で完全マークをする若い娘。それぞれに彼らを正しく叱る人がいて、見ていて胸のすく思いがした。男女三人のおとなは皆、厳しい表情がりがりしく美しかった。そんな顔も久しく日本のおとなが忘れていたものかもしれない。

(次回8月28日のメッセージは、ジャーナリストの木下明美さんです)

「日本の忘れもの」は、京都新聞ホームページ <http://kyoto-np.jp/kp/kyo-np/info/awc/> (パスワード: 忘れもの)で検索してください

明日につながる品質を。

日本の住宅用太陽光発電の歴史は、京セラから始まりました。^(※1) 最も長く選ばれ続けてきたからこそ、その信頼に品質で応え続けたい。



太陽光発電は京セラ

THE NEW VALUE FRONTIER
KYOCERA

学校で最も選ばれている^(※2) 「太陽光発電」は京セラ製です。 全国1,200校以上で採用。



※2 文部科学省「スクール・ニューディール構想」による採用実績校(平成23年2月現在 京セラ調べ)

※1 商品化された住宅用ソーラー発電システムとして、写真の商品「SAMURAI」は2008年発売です。